

叱られて 目には涙 心に花束

この夏、マイクロバスの運転ができるようになりたいと思い、中型車の免許取得（普通免許の8t限定解除）のため、近所の自動車学校（教習所）に通いました。

実習5時間の後、卒業検定を行い無事修了しましたが、いわゆる”学校”という類に通うのは35年ぶりのことで、指導を受ける立場になって、あらためて学校の子どもたちの気持ちがわかるような気がしました。

ハタチ前後の若者の中で一人だけこんな自分より年上の親父相手に、さぞや指導教官の皆さんもモチベーションが上がらなかったことと気の毒ではありましたが、指導教官もなかなか個性あふれる方々ばかりで、生徒の立場での束の間の学校生活は楽しいひとときとなりました。

自分の身の上話を語ってリラックスさせよう気を遣ってくれる教官。いろいろ質問してきて私の素性を何かと詮索したがる教官。指導以外の余計なことは一切しゃべらない寡黙な教官。愛想よくおだてまくってくれる教官。

そんな人間観察をしていると、子どもたちも我々先生方のことを、我々の知らないところで、さぞや、ああだこうだと好き勝手に噂しているんだろうなあという思いに駆られました。

そして、もう一つあらためて痛感したのは、やっぱり褒められるということは嬉しいものだということです。「うまいね〜。」「完璧、完璧。」なんて言ってもらえると本当に嬉しくなりました。でも、そんな時にかぎって、ついつい浮かれて調子に乗って、あら脱輪なんて失敗が待ち受けていたのです。

褒めて育てる。これは教育の基本だと思います。子どもの自己肯定感を高め、自信をつけさせる効果は絶大です。ただし、おだてたりおべっかを使ったりするなど、やみくもに褒めても意味はありません。

一般的論として、褒める場合のポイントは次のようなことが挙げられます。

- 1 具体的に褒め
- 2 本人が気づいてなさそうなことを褒める
- 3 現在進行形でほめる
- 4 人前で褒める
- 5 時と場合によっては、まだできないことでも褒める

特に、1番について補足するならば、その子のもともとの能力や表面的な特性や状況に焦点を当てて褒めることや、結果だけを評価して褒めることは、往々にして逆効果になる場合があります。

1990年代の終わり、アメリカ合衆国コロンビア大学の著名な教授が、人種や社会的、経済的地位の異なる10歳から12歳までの子どもを対象にした知能検査で、成績が優れていた子たちに「頭がいいね」と褒めてから、その集団に様々な検査を追加して行って検証した結果、次のような見解を導きました。

- ◇「頭がいい」と褒められた子どもは、自分は特段頑張らなくてもよくできるはずだと思うようになり、必要な努力をしないようになる。
- ◇「本当の自分は『頭がいい』わけではないが、周囲に『頭がいい』と思わせなければならぬ」と思い込む。
- ◇「頭がいい」という評価から得られるメリットを維持するため、ウソをつくことに抵抗がなくなる。
- ◇「頭がいい」と褒められた子どもは、実際に悪い成績をとると、無力感にとらわれやすい。
- ◇難しい問題に取り組む際、歯がたたないと「頭がいい」という外部からの評価と矛盾する。このときにやる気を失う。
- ◇「頭がいい」という評価を失いたくないために、確実に成功できるタスク、つまり、楽な方ばかりを選択し、失敗を恐れる傾向が強くなる。

「頭がいいね」同様に、例えば、「才能があるね」「さすがお兄ちゃん」「さすが〇〇委員長」などの漠然とした褒め方は要注意です。褒める時は、その子の具体的な努力や行動を褒めることが肝要です。そして、褒めるべき対象は、結果ではなく経過なのです。実際、人を褒めること自体、そしてその褒め方は難しいものと実感しています。子どもを上手に褒めることのできる教師や親はさすが、だと、褒め下手だと自認する私は手放しで褒めたいくらいです。“あっぱれ”そのもの。

褒められることが嬉しい。その一方で、人から叱られたり、厳しい対応を受けるようなことはないにこしたことはありません。当たり前前のことを当たり前完璧にやれる人間ならば、生涯、人に叱られたり厳しくされたりすることがないなんて人間も、もしかしたら存在するかもしれませんが、それは極めて稀有のことでしょう。

私が教習所で指導を受けた教官の中で、特に厳しく無愛想な、まるでゴルゴ 13 のような方がいて、注意や指導をするにしても、年上の自分に対して別にそんな怒り口調で厳しいものの言い方をしなくてもいいのでは、と正直内心むかついた時が何度もありました。

その教官が、すべての実習を終えた時にこんなことを言い残していきました。

「自分のことを厳くてやかましいと感じたかもしれませんが、我々も、人の命に関わること、人の人生を左右しかねないことに間接的に携わっていますので、まあ悪く思わんでください。ご苦労様でした。これからも安全運転で。」と。

同じ指導者として身につまされる言葉でした。後になって、教習所で一番厳しいけれども、最も信頼の厚い教官だということも所内の噂で知りました。

職業柄、教師や親や地域の大人が、別にさほど大ごとでもないことなのに、不合理な理由で、自分の感情に任せて、人格を否定・侵害して、相手に恐怖感を与えて、などの形で、子どもを叱る場面を何度も目にしてきました。未熟な私も、過去にそんなことが皆無だったとは言い切れません。あってはならないことです。

しかし、褒めて育てる、という一方で、本当に叱るべきことには本気で叱る、厳しく指導すべきことなら毅然と指導すべきだと思います。子どもの命や安全に関わること、社会的・道徳的ルールを守っていないこと、他人を傷つけていること、などなど、その子のためを思えばこそ誠心誠意をもって本気で叱るべきです。もちろん、上手な叱り方のポイントや人権には細心の注意を払うべきことは言うまでもありません。子どもが叱られることへの耐性も弱くなり、保護者も自分の子どもしか見えてない傾向の時代だからこそです。

本気になって上手な叱り方で叱ることができなくなった大人が増えてきたこと、そういう現代の世情を叱りたい気分です。大きな声で“喝”と。